

松山幸生先生講述・第4回

神の御子イエスの受難と栄光

第2章 5節から 9節 救いの創始者

- 5 神は、私たちが語っている来るべき世界を、
天使たちに従わせるようなことはなさらなかったのです。
- 6 ある箇所、次のようにはっきり証されています。
「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。
また、あなたが顧みられる人の子とは、何者なのか。」
- 7 あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、
栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものを、その足の下に従わせられました。」
- 8 「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、
この方に従わないものは何も残っていないはずです。
しかし、私たちはいまだに、すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません。
- 9 ただ、「天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたイエス」が、
死の苦しみのゆえに、「栄光と栄誉の冠を授けられた」のを見ています。
神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。

ヘブライ人への手紙を学び始めてもう4回目になります。(開始の1996年4月7日はイースターでした) この書物を読んでいく度に思うことは、著者は、イエス・キリストという御方を語るにあたって、非常に深い洞察力を駆使し、様々な角度からこの御方の全体像を誤りなく伝えたいという熱意、熱心がたぎっているということです。

(著者の主への熱心さを受け、更に更に熱心に語られる松山先生のお姿を思い出します。)

「ヘブライ人への手紙」が書かれた背景の復習をします。この手紙は信仰が後退しつつあった第2世代のユダヤ人キリスト者に宛てて書かれています。彼らは、迫害と誤った教理に直面し、ユダヤ教に回帰しようとしていた。誤った教理とは天使礼拝。紀元1世紀のユダヤ人たちは天使(御使い)を守護天使とするような過度な天使礼拝が流布していた。著者は、キリストが天使に勝るということを婉曲的に漸次的に宣べて、彼らを励まし勧告していく。勧告は5回あって、その第1回が前回の2章1節「押し流されない」でありました。

先ず、1章で著者は、御子の「**先在性**」(天と地との創造に先立って存在しておられたプレイクジステンス)を語り、天使に対して圧倒的な「**優越性**」をもった御方であることを述べられました。

そして、2章1節～9節では、御子と天使との本質的な相違を明らかにしながら、御子の働きが何であったかという核心について述べられています。特に2節～4節では、天使たちを通して語られた律法(違反や不従順の処罰を含むもの)の遵守に比して、遙かにまさる「**大きな救い**」について、まず主イエスが語られ、その福音を伺った弟子たちが確かなものとして人々に示し、また、神御自身も、しるしや、奇しき御業、奇跡を示され、更に聖霊を分け与えられることによって、証しされている、ということが述べられました。

この5節以下には「救いの創始者」という小見出しがあり、この箇所では、救いの内容として「神の御子の受難と栄光」が中心に述べられています。

私共は過ぐる聖日(1996年4月7日)に主のご復活を祝い、その前の1週間を受難週として過ごしたわけですが、主の御受難の出来事を一人ひとりが御言を通して大変深く味わって来られたことでしょう。そんなことを思い合わせながら、本日はヘブライ書の御言葉に、更に心を傾けてゆきたいと思います。

さて、本日のテキストに入ります前に、あることをお伝えしたいと思います。それは、アメリカのユージン・シュナイダーの「伝道」についての著書に、大変興味深い言葉があることです。「伝道上での中心的な課題は基本的に二つあります。ひとつ目はコミュニケーションで、『如何にして自分の意思を相手側に正しく伝えるか』ということ、二つ目はアイデンティフィケーションで、『信仰者としての自分自身を開示する(証しする)こと』で、これらがなければ、伝道はなかなか進みません。」という提言です。そして更に、「とにかく、私たちは、コミュニケーションに関してはよく学びますが、アイデンティフィケーションについては、『自分自身の信仰を証しするという目的を、相手側に置かねばならない』のですから、なかなか難しく、これがなされていないことが多い。従って、伝道は思うように効果を上げられていない。」ということが書かれています。

私も色々なところで、特に社会福祉との関わりの中で、御言を伝える際のコミュニケーションに関し「相手の立場に立って語られたイエス」ということを念頭に入れて語ってきました。具体的には、語り掛ける相手の目の高さに自分の目を置くことの大切さを覚え、また、相手に励ましや慰めを与えたりする際には特に「相手の立場に自分を置いてみて、心に響き、温まり、希望を持てる言葉を選ぶこと」を欠かせない要点としてきました。

5節

神は、私たちが語っている来るべき世界を、天使たちに従わせるようなことはなさらなかったのです。

ここは、なぜ唐突に天使のことを話題にしているのか、どうもよく分からない箇所と思えますが、「私たちが語っている来るべき世界」とは、神が著者たちを通して伝えて来られた「イエスがすべてを御支配なさる世界」または「主が私たちの救いを完成された世界」と捉えることが出来ると思います。そして、そうした完全なる世界には、もはや(不完全さを有する)天使を派遣して統治させる必要はない、ということでありましょう。

<天使支配の思想に影響を受けたペルシャ人からヘブライ人への伝搬>

ところが、ペルシャ帝国全盛の時代には、オリエントの思想影響を大変強く受けてきて、「世界は天使たちの支配下にある」という考え方が全土に広がっておりました。それは「天使支配の時代」と言われるもので、多少根性のねじ曲がった天使たちや、天衣無縫で人間たちの強い味方ともなってくれる天使たちなどが中心となって、世の中を支配する

と、思いもよらぬドラマが展開してきます。例えば、神の御前にうまく許可を取り付けた天使が、人間を試みに遭わせようとする、やりすぎてしまい、ヨブのように訳の分からぬ大苦難に遭遇させてしまう、というような（信仰的解釈とは異なる）奇抜で奇想天外な発想が、この時代には、もてはやされたようです。千夜一夜物語（アラビアンナイト）などに、そうした天使の発想が現れていると言えましょう。

そうした（悪）影響がユダヤ社会にも伝搬し、天使による世界支配というような発想が広まって行きました。そして、過去にそうした思想を味わったユダヤ人たちというのが、この手紙の受信者たちでもありました。「その時代」には、天使たちが世を支配していると錯覚させられていたかもしれませんが、「来たるべき世」、即ち「主御自身がお出ましになり、世界を御支配をなさる時」には、もはや「天使支配などありえない」ということを、著者はまず告げ知らせ、「新しい時代、主の来り給う時は、今とは全く違った新しい時代の到来になる」ということを訴えかけているのです。

天使の支配というものについて、今の私たちには、それはくだらない妄想だとか、偶像崇拜だと、はっきり言えますが、ユダヤ教の中では、ある程度真実味を帯びたものとして捉えられていたことが、想像に難くありません。それは新約の時代になってからも尾を引いて、ユダヤ教からキリスト教への「改宗者たち」の中は、そういう天使概念を内に潜めていた人々が少なからずいたのです。

ですから著者は、主が再臨される時、即ち、新しいキリストの時代には、もはや天使たちの働きが無用になるということを、敢て告げなければならなかったのです。それが、一見不可解と思える5節が記されていることの真相なのです。

そして、当時の世界を想像しますと、神が与えてくださった平和もなければ、キリストが与えてくださる恵みも受け取れず、ただ混乱があり、諍いがあり、葛藤があり、そして搾取があり、抑圧があった。どうしてイエスが御体を裂いて与えてくださった大いなる恵みが、すんなり通っていかないのかと、誰かが問うてくる時、著者は「それは今だこの世を天使たちに任せておけば良いと、錯覚し続けていたからなのだ」と答えます。彼はそれを「**私たちの罪の時代**」と表現しているのです。

新約神学に立てば、「私たちの罪責がまだ完全な形で、主イエスの贖いによって放免されていなかった時代」という形で語らねばなりません。長い伝統と歴史の中で、ユダヤ教の信仰を堅持しているヘブライ人に向かって、それをいきなり全面否定することはイエスもなされなかったように、彼らの思いの中にあるこの世の現実を、少しずつ神の方向に向きを変えていこうという営みが繰り返されていったのです。

「それが実はキリストの計り知れぬ忍耐であり、キリストの御受難とも結び付いている」ということを語ろうと、続く節にこんな聖句を置いているのではないかと思います。

6節から8節前半

6節 ある箇所、次のようにはっきり証しされています。

「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。

また、あなたが顧みられる人の子とは、何者なのか。

7節 あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、
栄光と栄誉の冠を授け、

8節前半 すべてのものを、その足の下に従わせられました。」

(ギリシャ語訳詩篇からの引証)

これはギリシャ語翻訳した詩編8編5－7節からの引証ですが、ヘブライ語の詩篇と比較されて、明らかに違っている箇所を見つけて頂きたいと思います。表現的には多少違う箇所がありますが、それは無視なさって。(ここから暫くギリシャ語翻訳との比較が続きます。)

5節 そのあなたが御心に留めてくださるとは
人間は何ものなのでしょう。

人の子は何ものなのでしょう

あなたが顧みてくださるとは。

6節 神に僅かに劣るものとして人を造り

なお、栄光と威光を冠としていただかせ

7節 御手によって造られたものをすべて治めるように

その足もとに置かれました。

(元々のヘブライ語詩編からの引証)

両者において、はっきり違いの分かるところは、この手紙に記されるギリシャ語翻訳7節の「あなたは彼(=イエス)を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが」との聖句と、元々のヘブライ語詩篇の6節の「神に僅かに劣るものとして人(=人間)を造り」との聖句との大きな違いです。

なぜ、こんな違いが出て来るのでしょうか？ これは著者が無闇に訳を選択したのではないのです。これから述べようとする自分の真の理論(天使礼拝を否定する立場)を明らかにするために「彼の反論に都合の良い聖書訳の箇所」を選んで、引証したのです。それが「ギリシャ語七十人訳聖書」だったのです。ですから、一旦それをそのまま借用し、彼は自分が天使礼拝に反論している根拠を、その7節を提示して、明確に示したのです。

ですから、敢て七十人訳を引証した著者は、「人の子」という言葉を「神の子として選ばれた人間」でなく「神の御子」と捉えているのです。「あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた。」と述べている「彼」とは「イエス」を指しているのです。

「御子を天使たちよりも低いものとされた。」しかも「それは限定付きの「わずかの間」であるが。」著者は、ここで何を言おうとしているのか、お分かりになりますか？

わずかの間ではあるけれども、イエスは天使たちよりも低い存在、即ち、唯の人間として、御自分の身を置かざるを得なかった。それは「十字架上で神性を完全に封印されて、完全に無垢なるひとり人間となられて、人類の罪責の贖いを遂げられねばならなかった」との理由からであり、それを、ギリシャ語翻訳者たちはこういう形で表現したのだと著者は紹介したのでしょうか？ いいえ、そうではありません。

十字架上で、神性は封印されて発動されなくとも、決して失なわなかったことではなく、イエスが神であられ、天使はその神に仕える存在にすぎないことは、不動の真実なのです。瞬間であろうとも、天使と御子イエスとの逆転はありません。

「天使の世界支配」の発想を少なからず堅持していたであろう当時のギリシャ語聖書翻訳者たちは、神イエスにおけるそうした不動の権威と尊厳を認めず、こともあろうに「天使たちよりも低い存在、天使たちの守護や支配や導きによらねばならなかった存在としての「わずかの間」があった」と詩編を故意に意識したのです。これは、神イエスへの冒瀆罪です。このことを著者は摘発するため、わざとここにギリシャ語七十人訳の引証を記して心ある人々の関心を引こうと志したのではないのでしょうか。そうとしか捉えられません。

また、ヘブライ語の詩篇にも「神にわずかに劣るものとして人を造り」との聖句により問題が生じています。「人は他の被造物よりは優れている。その上に立つ者として創られたのだが、神よりはわずかに劣るのだ」と捉え信じ込んでいる人たちが多くいるからです。そもそも神に劣る者として人間が創られという時点で、神と人間とは本質的に次元が違うことを前提にしているのです。神との比較などできようはずがなく、その差異を「わずか」とあるのは、聖書にそう記すことを許されたのは、神の寛容か、ユーモアであられましょう。この「わずか」とは、永久に埋まらぬ「永遠のわずか」なのですから。

(

8節後半

「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、この方に従わないものは何も残っていないはずですが。しかし私たちはいまだに、すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません。

<神の御言の完成は、約束の遂行である>

旧約聖書の思想の中には、一人の人間が、神から御旨を成し遂げることを命じられる場面が沢山出てきます。ところが、その人がそれに失敗すると、神はその代わりの人をお立てになって、その仕事を遂行させるという思想があるのです。これは旧約聖書をずっとお読みになるとお分かりになると思いますが、色々な人が立てられ、そして神に逆らって滅び、また新しい王が立てられて——という形で続いていくわけです。

このことは、創世記の言葉を借りて言えば、アダムは神のお造りになった全被造物を支配し、管理し保全しなければならない使命が与えられ、また土地をしっかりと守ってゆかなければならない責任が与えられたのに、それを最後まで遂行することができませんでした。従って誰かが代わってやらなければならない。アダムの背信によって、地はもはや呪われたものになった、神の秩序立ては破壊された、だから誰かが担わなければならないのだけれども、それを担える者は誰もいなかった。次々に立てられる者たちが現れても皆、神の御言、祝福を人々に分かち与えることができない器で、つまずき倒れてしまった。それ以来、地は呪われたものであり続けてきたのです。

そこでパウロは、ローマ人への手紙8：19の中で「だからすべての造られたものが、神の子たちの出現を待ち望んでいる」と記しているのです。そうした現実の只中に、イエスが登場してくださり、神の御言への従順」という在り方を貫かれることによって、全ての人間に対し、神への信仰の何たるか、そして、神の子としての相応しい振る舞いの如何を、御身をもってにつぶさにお示しになられたのです。

ちょっと脇道に逸れますが、この小見出しに「救いの創始者」という言葉が使われており、この「創始者」について、バークレーがすごく面白いことを語っているのです。

(バークレーのリーダーとは『戻ってくる』)

「創始者というのは勿論パイオニアと呼ばれる内容と異ならないのですが、次のように考えることが最も良いことではないか」と言っています。

「創始者と訳されているこの言葉の来歴は、例えば『航海中に船が難破して船客たちは溺れ死にそうになる。これを救うためには、誰かがいち早く海に飛び込んで岸まで泳ぎ着き、そこからロープを張って船まで戻ってこなければならぬ』そうした役割を見事に果たした者を『創始者』と言うのだ。」と

私たちは、こうした場合、岸まで泳いで行くのがせいぜいで、そこに着くと、自分の安全地帯を確保して立ち止まる。そして、その後、ロープを張って、もう一度難破船に戻って行くようなことは、殆どないのです。

このお話は、「来たるべき日、罪の世界にイエスが再び戻って来られる日、それは、私たちをそこからもう一度神の国に導き上げてゆくための『主の御再臨の日』なのだ」ということに繋がるだろうと思います。

救いの岸に向かってイエスは既に泳いで行かれた、私たちもその主に従って泳いで行けばよい。となれば、ハッピーエンドですが、そんな気力も体力も、難破船の中では残っておらず、もはや、自分の手や自分の力、自分の足で救われる道は全くないのです。だからもう一度船まで戻ってきて、わたしのロープに伝わって歩いて行きなさい、と言って導き上げてくださるイエスの御力によって初めて、私たちは神の国に入ることが出来るのです。

<「すべてのものを、その足の下に従わせる」とは>

それは、すべての者の上に君臨して、誰かのように威張り散らすことではなく、「イエスは、御自身の歩んだ足跡を、今、共に歩ましめる」ということなのです。そういう意味で、この言葉は、私たちにとって何より大切な御言であると思います。

ですから、私はくどくどと語っているわけでありまして、そういう神の御子のお働きを私たちはしっかりと受けとめていかなねばならないと思います。

(くどくどと語ってくださらないと分からない自分をみつめております。「すべてのものを、その足の下に従わせる」という意味がここで初めて分かりました。)

<神の深い御心に敢て叛逆する人間の自由意志>

「私たち人間は、神に何のために創られたのか？」それが実は「救い」という問題の中では欠かすことのできない、大事な問いです。創世記1：26から読んでみましょう。ここは、神が人間をお創りになったときの記録なのです。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』。神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ』。」

これが、初めの人間に、神が与えられた御命令なのです。最初の使命は、神のすべての被造物を支配することだった。つまり、神の御心に従って維持管理し保全すること、それが彼らに与えられた大事な使命だった。ところが、この地の統治者として神の代わりにそれを遂行するように創られた人間は、神の御望みのためではなく、自分自身の満足のために全ての被造物を支配しようとし、罪の中に墮落していったのである。

神は色々な権能や個性を人間に付与なさって（それを、神の形に似せてと表現していますが）私たちに創ってくださった。ところが人間は、神の代行者でなく、神御自身のようになりたいと考え始めた。神は御自分のように義しく生きることを期待しておられたのに「神の思惑とは全く違った目的意識で、神のようになろうとした」、言い換えれば「保全したり、養ったり、支えたりすることではなく、思いのままに神の被造物を動かす、自分の都合のいいように造り変えることこそ、支配だと考えるようになった」そのように考え始めたのは、善悪の知識の木の実を食べたからだと言われます。そして、この木の実を食べたという処で、聖書はとても興味深いことを記しているのです。

「彼らはこの木の実を食べると、目が開けて、自分たちが裸であることに気がついた」と。これは、聖書のもっている中の最高のユーモアであろうと、私は思うのです。神から、身にまとうべき色々な力を与えられて人間は創られたのに、「神の知恵によらないで、自力でやってみよう、自力で生きていこうと思った」とたんに、「彼らは裸であることに気が付いた」のです。何の力も無くなってしまっていたのです。何もかも消えて無くなるのは当然なのです、彼らは元々「土の塵」なのですから。

創世記を讀んでいく時に、どうしてこんなことが起こったのだろうかとか、なぜ、誘惑する蛇がいたのだろうかとかの方向に関心が向いてしまいがちで、「裸に気づいた」という辺りに余り着目しないのです。主人公は、それまでは神の恵みの中に生きていたので、元々裸であったのに裸とは気づかず、平気で過ごせていたのです。無一物で何の力もなかったのに、神の恵みによって、力ある者のように思い込んで生きてこられたことは、神の深い親心によって許されていただけなのです。

しかし、自分の力だけで生きてみようと考えた途端、何の力もないことに気が付かされた。そこで素直に「ごめんなさい」と言えばよかったのに、「何故、あなたはこんな風に

私を創ったのですか?!」と、こともあろうに、神に文句をつけたのです。「神様、あなたが私を裸に創ったので、恥ずかしくてあなたの御前に出られないのです。私が悪いのではなく、あなたが悪いのですよ。」と、こんな具合です。元々人間は、自己中心という自由意志と、他罰性という自分を逃がす悪知恵を秘めており、例の「善悪の知識の木の実」は、それらを発動させるために、神が予め仕込んでおられた『ボタン』であったということが、ここまで来るとすごくよく分かるのです。

こうした傲慢、高ぶりは、この手紙の2：5以下に描かれているイエスの御父に対する遜りの道とは全く逆様の姿を露呈し、そこに神は、激しい憤りと深い悲哀をお感じになって、「彼らをエデンの楽園から追放された」のです。このことは「神の深い御心に敢て叛逆する自由意志」を発動した人間の『原罪』に対する神の厳罰であられると同時に、尚も、その後の彼らへ最善なる処置を図られる神の親心でもあられたのです。

冒した原罪のゆえに、神の子として貸与されてきた栄光と誉れの冠を奪われ、見る影もないみすばらしい姿で追放された彼らは、今度は、神の被造物の前に立たされたのです。そうして、神様の代理人のつもりで被造物の前に立った人間が、それら被造物への独善的アプローチにのめり込み、彼らなりの苦慮、采配を重ねてゆく姿は、今日になっても少しも変わっていないのです。そして結果的に、そのことが、どんなに環境破壊を生じ、民族差別を起こし、あるいは混乱を来し、世界に破滅的打撃を与えて続けていることか。それは、人間が神から委ねられた支配の権限を、今尚「原罪を抱えた裸のままで行使しようとしている」ゆえに、起こってきていることなのではなかろうか。

そうした裸のゆえ冒し続ける原罪の罪責を贖ってくださるため、御子イエスも裸と成りて十字架にかかれ「お前たちの裸と追放は、これで終わりとしよう。」とお告げになりました。けれども、私たち人間は、尚も裸のままの支配者であり続けたいと妄想している。人間は「神から初めに貸与された栄光と誉れの痕跡を追い求めて」統治者としてのプライドに依り縋り、その虚しい旗を振りかざして、この地を我が物顔で支配せんとし続けている。そんなことが、今日のところを読んでいきますと、すごく強く思わしめられるのです。

(現在、私たちが直面している環境破壊等の諸問題をアダムスの原罪にまで遡って明晰に説明されています。神様の真の親心に対する、人間の自由意志の傲慢の報いを、人類は(そうとは知らず、知ろうともせず)背負い続けています。それ故「今こそ悔い改めの時である」と松山先生は力説し続けられたのです。)

モーセの後継者ヨシュアが率いて、出エジプトの到達地、乳と蜜が流れるカナンの地に入った時に、彼に対して神が「この地はわたしの聖なる土地であるから、あなたの足から(汚れた)履物を脱ぎなさい」とお命じになった。それは「謙虚さ」、つまり、神の所有地であられることに対する謙虚さを、神は求められたのです。ですが今や、神は諦められたか、私たちにそんな謙虚さを求められることは全くないのです。それゆえ、神の土地を我が物顔で切り売りし、あるいは各自が所有権を主張し合って、混乱を招いています。そして、天にも届くようだと自認する高い塔を建てて、私たち人間の文化はこんなに素晴らしいと、かつてイスラエルの人々が酔いしれたように、今の人間たちも同じようなことをやっているのです。

ですから「創世記」を今の時代の真っ只中で読んでみますと、「今まさに、これが起こっている」と思うほどに、現実と符合しているのです。それが「原罪」であるのです。そういう私たちに対して、いや、そういう「神に叛逆する者」の子孫を生むにあたって、「それが遺伝しない方法がある」と言われるのが、主イエスの荒野における四十日四十夜の断食後のサタンとの闘い方であり、十字架までの御受難と葛藤の道筋であられました。主はそういうことを一つ一つクリアされながら、幾らそんなことがあっても、それに耐え抜かれ、乗り越えられる力を、御父からの聖霊を通し、与え続けられておられたのです。そして主は、あなたも敬虔に神に聴き、お従い続けるならば、キリスト者としてのあなたの名誉もあなたの地位も損なうことは決してないと、厳かに語ってくださるのです。

例えば、政治犯として、主イエスの右隣の十字架にかけられていた者が、主を主として崇め、悔い改めと共に、せめて自分の名を覚えていて欲しいと願い出たとき、彼に向かってイエスは「あなたは今日わたしと共にパラダイスにいるであろう。」と仰った。彼は赦される機会などありえなかった存在です。それゆえ主と共に十字架にかけられたのです。その存在に対してイエスは「あなたの御国での命はわたしが保証する。」と告げていただきました。「主の救い」とは、過去の行状依らず、今、まさにその時の、真摯な信仰に依るのです。死の間際においても「わたしを信じるか？」と問われる主に、「はい！」と答える者を、主イエスは、必ずや、救ってくださるのです。

(ギリギリのところまで追い詰められても、それに気づき、その時、悔い改めることによって、罪赦されて神の御支配に入ることができる。)

自分は裸でありながら、かつて神から創られたその日、神から貸与された栄誉と栄光を自分のものであるかのように錯覚した罪で、地の支配権を取り上げられたアダムと同じ心の姿をしている者たちが、今、世界中で凄惨な暴力の応酬なる争いを繰り広げています。富める国が貧しい国からの略奪を尚も繰り返し、異常なスピードで環境破壊が進み、あるいは多量のCO₂排出により引き起こされる自然災害の猛威、科学兵器への飽くなき欲求から引き起こされる大量虐殺、あるいは生物兵器による難病奇病の発生、というようなことは皆、私たち人類がこの世にばらまき、拡散し続ける「罪」に対する神の応報なのです。

ところが私たちは、常に第三者の立場で、それらを画面を通して眺め、誰のせいなのか、何ゆえなのかと、他人事に行っているだけなのです。「神様、あなたの御手を伸べてください。憐れみを懸けてください。和平をどうか実現してください」と、神様に事の収集を全てお任せするばかりです。自分自身が「私の生き方を心から悔い改めますから、どうか、あなたの御支配と秩序をもう一度回復させてください」とは、なかなか祈らないのです。

9節

ただ、「天使たちよりも、わずかの間、低いものとされた」イエスが死の苦しみのゆえに、「栄光と栄誉の冠を授けられた」のを見えています。神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。

9節のところに来て、著者は初めて「イエス」という御名を記すのです。そこまでは「御子」であられ、イエスという御名前は出て来ないのです。ということは、神が私たちの中に救い主として派遣して下さったその御方が、あのイエス様なのだ。あなたがたがメシアとして依り頼むべきは、唯一イエスという神の御子であられるのだ、ということをもう一度改めて、力強く宣言することを明記しているのです。

当時イエスに対しては「ナザレのイエス」という言葉がしばしば使われてきました。「ナザレのイエス」ということは、偉大な預言者イエスであって、神ではない「人間」というイメージなのです。人々は、自分たちの仲間イエス、傑出した力を持った指導者イエス、という形でイエスを受けとめていたのです。

けれども、十字架と復活という神の出来事を経て、この「イエスという御方」が、今やあなたがたの中に埋もれていた「ナザレのイエス」ではなく、正真正銘「神の御子イエス」であられることを証明して下さった。だから、今こそ、私たちは、この御方によって向こう岸まで張られた救いの綱を頼りに、神の国へ向かって歩いていこうとなったのです。

<すべての人々のためにイエスは死んでくださった>

この言葉を、礼拝において私たちは絶えず耳にしますけれども、このイエスの御前では、人種も国籍も、貧富も権威も、様々のものが何一つ隔てにはならないことを意味しているのです。では、このイエスの御前に立つには、裸のままでもいいのだろうか？

いいえ、少なくとも、罪の汚れ、弱さと不完全さを負う欠けや破れだらけの自分の姿を自覚している「私」であることが、必要不可欠なのです。

十字架の主の下にひれ伏して「悔い改め」の涙を流し、その潤んだ目を上げて、天を仰ぐ時、そこに私のために死んでくださった神の御子、死に勝利されて、栄光と誉れとをまわられているイエスを見上げることができます。かように導かれる聖霊に依らなければ、傲慢な思い、自己満足、自己義認ための似非信仰を、打ち砕く力は生涯持てません。

(悔い改めとは、自分の惨めさを見つめることではありません。目を覚まして、十字架の光を仰ぐことです。十字架によって新しく造られている自分に驚くことです。「信徒の友」2021年9月号。使徒信条「十字架につけられて」平野克己牧師) この引用は後書に持っています。

<私についてきたいと思うなら、日々自分の十字架を負ってついて来なさい>

ひとり、また、ひとりが、キリスト・イエスに選び出され、心からの感謝と応答をもってお従いゆく時、主による「大いなる救いの時」が、一步一步、確実に着実に完成に向かっているのだと信じます。

今日のための準備を受難節から復活節にかけてさせて頂けたことは、私にとっては素晴らしいお恵みであったと、皆様には心から感謝しております。 (1996年4月13日)

「キリストの両性について」

森 容子

キリストの人性・神性の両性については、初代教会時代より、信条の制定に伴って長年論議の的になってきたことである。今日の「統一された二性」即ち「全き神にして全き人」という見解への理解において、先ず、制定に至った歴史的経緯を述べてゆきたい。

＜キリストの人性・神性の制定に至った歴史的経緯＞

325年、「御子の神性について」を主要議題として、第一回ニカイヤ公会議が開催された。東方の長老アレイオスは、御子キリストは、「絶対的超越性と非分割性とを有する父神との類似性（ホモイウシオス）をもった被造物」とし、「御子が存在しなかった時がある」という論を展開した。一方、西方の司教アレクサンドロス（会議後はニカイヤ司教のアナタシオスが活躍）は、御子キリストを、ヨハネ福音書に基づき、「御父より生まれ、ロゴスなる先住性をもった、御父との同質性（ホモウシオス）の神」と主張した。

尚、東方の主流は、「そもそも人間が墮落して地に落ちてきたため、神が人となって救済して下さった。即ち、降臨のキリストが神でなければ救済が成立しない。」という「キリストの神性」を主張し、西方の主流は、「キリストが贖いとなって、人間と神とが和解し、正しい関係を取り戻して下さった。即ち、キリストは神であると共に罪なき人間でなければ贖いが成立しない。」という「キリストの両性」を主張した。

この大論争の末に、ローマ皇帝の名の下に「キリストは全き神である」としたニカイヤ信条が採択された。が、信条に盛り込まれた「ホモウシオス（御父との同質性）」という言葉が聖書にはないため、ニカイヤ信条の後半にはアナテア「～する者は呪われる」が付け加えられた。

428年、アンティオキア学派のネストリオスが、伝統的な聖母マリアの呼称「テオトコス（神を産んだ）」を「キリストトコス（キリストを産んだ）」にすべきと推奨。それは、当時始まっていたマリア崇敬への危惧と、キリストの人性強調とを表明するものであった。そして、イエスを表現する際、「人性と神性とを区別し、神性が人性に飲み込まれないようにする必要がある」と説いた。

それに対し、アレクサンドリアの主教キュリロスは、キリストにおいては人間的なものも神化されうると、「人性と神性の交流により、一つとなる」との見解を打ち出し、アンティオキア学派の「人性と神性」の二つの本性の両立との見解からは、「異端的」とされた。

431年、エフェソスにて東方と西方の合同公会議が招集され、「キリストトコス」を主張したネストリオスは、「異端」として断罪追放された。

433年、エフェソス合同公会議にて、一致定式；「全き神にして全き人」が制定され、神性によれば父と同質、人性によれば人間と同質であり、キリストは二つの本性の合一であるとする「テオトコス（母マリア問題でなく、キリスト理解）」が改めて採択された。

449年、アレクサンドリア主教となったディオスコロスは、キュリロス派のエウテュケス（単性論者）に掛けられた「二つの本性の混合」の嫌疑を晴らすためと称し、ネストリオス派の残党の一扫と自身の勢力拡大を企て、皇帝テオドシウス2世の下に、エフェソス合同会議に臨み、その目的を強引に果たした。後に「強盗会議」とまで呼ばれる。

451年、ローマ司教レオによりカルケドン公会議が招集され、単性論者キュリロスの流れを強調した「カルケドン信条（定式）」が制定された。この信条では、「～でなく、～でなく、」という表現にて、「二性の統一」が強調された。

これら約200年の激しい論議を経て、キリストの人性・神性の制定が、かつてのテルトゥリアヌスの定義「父・子・聖霊なる神は、実体はひとつの神で、霊的統一性が保たれており、相対的位置により夫々個別の性格を有する三つの位格（ペルソナ）に変化すると共に、同時に存在する」と結びつき、西側の教え：「全き神にして全き人」が一致定式となる。

<三位一体の教理における違い>

ここで、現在の東方教会（ギリシャ正教・ロシア正教・景教等）と、西方教会（カトリック・プロテスタント・聖公会等）における教理の違いの一端を、「三位一体の教理」から述べる。

東方教会の三位一体の教理は、△型で、頂点が御父、底辺が御子と聖霊を示す。従って、御父に対する御子の立場は下位で、御父が絶対的権威者であるとされていると共に、聖霊も御父からのみ発するとされているのが特徴である。

一方、西方教会の三位一体の教理は、▽型で、上辺が御父と御子を、底点が聖霊を示す。特に、御父と御子が「ひとつ」の関係とされ、それゆえ、聖霊も、御父・御子双方から発するものとされるのが特徴である。但し、地上で御子が生きられておられた際の聖霊の働きは、御父から発せられたものとされ、御子も御自身を御父の下位に置かれていた。御子の復活後、ペンテコステ以降の聖霊の働きは、主に御子から発せられるものと解釈されることが多い。ゆえに、「御父と御子」、「御子と聖霊」、この両者二つの関係は「同列ないしひとつ」で、濃密であるとされているのが特徴と言えよう。

<キリストの両性論>

ここからは「キリストが達成された和解」を中心に、「キリストの両性論」を展開する。キリストは、御父と人間との和解を目的として地に降られた。それは、キリスト自身の意思であると同時に、御子を世に遣わされた御父の意思でもある。

キリスト・イエスは、人の罪と罪に対する神の断罪とが、普遍的体験として交錯する世界の只中に誕生された。その受肉は、人間性を引き受けて神性と統一されたことであり、それが即、実質的に贖罪を含むと解釈されるべきではない。「**神性を有する**」イエスはまさ

に、我々人類の一員として、我々の本性と我々の運命とを共有される「**人性をも有する**」ことにより、「世を御父と和解させるという、神的職務を完遂された」のである。

人類唯一の受肉は、罪深い我々人間たちの世界におけるキリスト（即ち、神の国）の出現であり、その只中でキリストは、完全に御父の御心と共に生きられ、最後の最期まで御父への従順を貫かれて、人が生涯冒し続ける罪と、その拭いきれぬ罪責に対する神の裁きとの前に、お立ちになったのである。

こうして、この世の中で、御父に対し罪なき人生を生きられることによって、キリストは、御自分の人格の内において、人間的本性と神とを和解させられたのである。換言すれば、キリストは、御自分の人格において、「**人間の罪なる本性を掬い上げ、それを瞬時に罰して、ゆるし救われることにより、神との和解に至らしめられた**」のである。

この立場に立たれたキリストは十字架の上で、肉の罪を自覚し、キリストの名によって悔い改めたすべての人々に、同様の和解と同様の勝利に満ちた永遠の命とを差し出されたのである。

使徒パウロは、このキリストを、新しい人類の頭（最後のアダム）として提示する。冒した原罪の処罰によって、神がすべての人類に死の定めをもたらした始祖アダムのように、キリストの存在と言動が普遍的意義を放ち、人々がキリストと生命的に一体化されること（水と霊の洗礼）によって、彼らに永遠の命と復活の体をもたらす、救いの道を開かれた、と。

更に、人類の罪を悉く裁き、かつその罪責を悉く赦すという神事は、唯、神が無垢の御子キリストを、人類の罪責の処罰の全き犠牲として十字架の上に磔にされることによるのみ、実現されるのである。イエス・キリストが犠牲を捧げられた神事は、あらゆる人間の祭司の手を離れ、御子御自身が大祭司として執行されたことであり、それは、御父に御身を捧げられた御子の犠牲行為であられると同時に、その犠牲を信ずる人間との和解を受け入れられた御父の行為でもあったのである。

また、それには、イエスが洗礼者ヨハネによってバプテスマを受けられた行為が、深い意義を有する。それは、「メシア的王としての油注ぎ」であり、「自己献身と自己聖別との偉大なる告白」であると共に、このバプテスマによって、イエスはその公生涯の出発点において、「愛によって可能となられる限界まで、罪人なる人間を御自分とを一体化ならしめた」ということを、彼らに理解せしめたのである。

よって人間たちには、十字架上でイエスが、「**自分たちの靈魂の上に重くのしかかっていた罪責の重荷すべてを、御自身の靈魂の上に担われ、贖われた。**」ことを知り、その負債が計り知れないことを自覚して、深く悔い改めよ、と聖書に記される。

だが、人間の罪に対する御父の断罪の和解としてのキリストの十字架は、彼が「全き神」そのものであり続けられる限り、「犠牲」とも「宥めの香り」ともなりえない。御父に、御子（神御自身）の御体を捧げても、御父にとっては何の意味も有しない。ゆえに、献げる「犠牲」は、御父にとっての「他者」、それも「罪に対して無垢である全き人間」が、

捧げられなければならない。

それが、イエス・キリストという御方の神性が十字架上で封印され、「全き人性」を取られた必然性であり、受肉されて天より下って来られたのも、十字架上から「エリ、エリ、レマサバクタニ」との御言を叫ばれたのも、それゆえである。換言すれば、そのとき、御父との霊的交信が完全に分断され、御子キリストは一旦完全に「神の他者」となられ、十字架上における「全き和解の献げもの」として御父に受け入れられて、「全き救い主」となられた。このことを、先の「わが神がお見捨てになった」との叫びをもって、世に知らしめられたのである。イエス・キリストが、それまで両性をもって生きられた「全き神にして全き人」なる奥義が、そこに秘されている。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において、（人間の罪と、その罪に対する神の断罪とからなる）敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において、一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」
(エフェソ2：14－16)

最後に・・

イエス・キリストの甦りと昇天において啓示された、天国という“異郷の地”に赴く「神の御子の道」の完成は、同時に「人の子たちの帰郷」に対する認識を育み、その「復活の希望」によって、今日のキリストの御体なる教会は、生起するのである。

<主な参考文献として>

- ・菊池榮三・菊池伸二著 『キリスト教史』 教文館 2007年
- ・『フスト・ゴンザレス キリスト教史 上巻』 石田学訳 新教出版社 2007年
- ・ジュームス・デニー著作集第4巻 『キリスト教の和解論』 一麦出版社 2008年
- ・『カールバルト教会教義学 和解論 I/2 僕としての主イエス・キリスト上』 井上義雄訳 新教出版社 1979年
- ・『カールバルト教会教義学 和解論 II/1 僕としての主イエス・キリスト上・1』 井上義雄訳 新教出版社 2009年
- ・R. ブルトマン著『史的イエスとキリスト論』 飯峯明、橋本滋男訳 理想社 1965年

写者あとがき

今回は聖書の読み方の難しさを痛烈に感じました。特に七十人訳（ギリシャ語私たちが用いている新共同訳ないし聖書協会共同訳に引証されている場合には立ち往生するしかないというのが私の感想です。今回7節の七十人訳では「あなたは天使よりも、わずかの間、低い者とされたが、栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものを、その足の下に従わせられました。」となっており次の文章が読めなくなりました（あくまで私の場合です）

詩編8編6節からの文章は読み進めることはできません。

この理由について詳しい論述が松山幸生先生によってなされているのが今回の特徴です。森容子先生のご指導でかなり簡略明瞭に要約して頂きましたが、次回以降2章全体を学びつつ、一層理解を深めたいと思います。

「救いの創始者」と小見出しがついている5節以下の目的は次のように註解されている
「イエスは神の子であると同時に、真の人間としてこの世に来られた。なぜ神が人とならねばならなかったか。それはこの地上で住む人間の罪の贖いが神ご自身による以外に不可能であったからである。それゆえ御子は低い者となり試練を受けられ、死の苦しみを経て、またこれを味わわれ、血の肉にあずかり、すべての点できょうだいたちと同じようになられたのである」（新共同訳新約聖書註解Ⅱp350）

以上のことから森容子先生の「キリストの両性について」の論文を掲載させていただくことになりました。聖書全体の理解の上にも欠かせない事項であると考え特段のお願いをしました。